

基 調 講 演

【第12回北陸地域連携プラットフォーム 平成29年3月21日(火)】

演 題：「地域資源を活用した農業の6次産業化の取り組み」

説明者：株式会社金沢大地 代表 井村辰二郎

皆さん、こんにちは。石川県金沢市と能登の珠洲市、穴水町、輪島市、能登町で有機農業をやっております井村と申します。私は北陸財務局の財務行政モニターをさせていただいている御縁がありまして、今日お呼びいただいたのだと思っております。日頃は、農業に対して本当に色々と御支援を頂いております、農業者の一人として感謝申し上げます。

私は、1964年東京オリンピックの年に生まれて、現在52歳であります。1964年という言葉が今日の話の中で少し出てきますので、1964年、東京オリンピックの年を是非意識していただければと思います。私は、中学校、高校、大学でよく食育や農業の話をするがあります。今日はそのコンテンツの一部を持ってきましたので、皆さんと、農業って一体何だ、そもそも農業って何だろうというところから少し共有できればと思っております。

国語の授業ということで、「農」という字はどのようなつくりになっていますかということ子どもたちと勉強するのですが、省略しますと、耕作放棄地ですとか、耕作して植えることが「農」の本来の意味であり、これは東洋の話です。

では英語圏ではどうなのかというと、「agriculture」が農業という意味で、これは、「agri」と「culture」という2つの言葉から成っておりますけれども、これも「cultivation」、耕すということが「culture」の語源で、心を耕すとか文化を耕す、そういったところから来ていて、やはり西洋でも「cultivation」、耕すということですから、農家にとって耕すことがとても大事なことだと認識しております。生産調整ももうすぐなくなりますけれども。

次は歴史です。これは私たちのフィロソフィーである「千年産業を目指して」、1000年後に農業はあるのかないのかということ子どもたちと議論するのですが、答えは出ていますと思っておりますけれども、「日本でいつ頃米づくりが始まったの？ 農業が始まったの？」と子どもたちに聞くと、中学2年生ぐらいで習うのですが、元気に「弥生時代に稲作が始まりました」と。

では、世界で始まったのはいつか。これはチグリス・ユーフラテス川のところで、皆さんシュメール人は覚えていらっしゃるかもしれないですけれども、メソポタミア文明で小麦の栽培が始まったわけです。これはつまり、日本でも西洋でも農業というのは大変古い産業であるから、将来もあるべき産業ではないかと子どもたちに問います。

それから、中学校2年生で「衣食住」という言葉も習います。これは人々にとって大変重要なキーワード。この「衣食住」ももちろん農業と深い関わりがあります。皆さん御存じのように、「衣」についてはシルク、ウール、麻は伝統的な農業です。羊を飼って毛糸を紡いでウールをつくります。「食」、これは言うまでもありません。食べ物は農業に係る

ることです。それと「住」、これは少し難しいですけれども、子どもたちは本当によく勉強していて、「こうぞ、みつまたで和紙をつくります」、「和紙で襖ができます」と答えます。また本当に勉強している子は、「い草で畳表をつくります」と答えます。石川県というのは昔から小松市がい草の産地で、日本では熊本県や広島県がい草の産地で有名ですが、今はほとんど中国産になっていますね。

子どもたちと共有することは、いかに農業が古くかつ私たちにとって重要な産業であるのかということ。6次産業化ということもありますけれども、私は今村先生に少し異を唱えているところがあって、本来、農に全てがあったのではないかと子どもたちにも話します。

では、農業って何だろう。先ほど高橋課長にもお話いただきましたが、6次産業化という言葉が出てきて、昔は足し算だったものが、最近はどれか1つが欠けてもゼロになるからということで掛け算ということですが、今、金沢の中学校に行くと、「お父さんが1次産業の人、手を挙げてみてください」と言ったら、皆さん何人ぐらい挙げると思えますか。答えはゼロです。今まで13校ぐらいの中学校で話をしていますが、1人だけ手を挙げた子がいましたけれども、よく聞いたらおじいちゃん、しかも兼業農家ということで、今は金沢でもゼロです。先日金沢工業大学で話をして、120人の大学2年生の前で聞きましたら、1人広島の方でお父さんが農業をしているという方がいました。これぐらい今農業者は減っているわけですね。私もびっくりしました。実際は手を挙げてもらうとほとんど3次産業のお父さんが多いです。このような中で農業って何だろうということで6次産業化について子どもたちと話をしますが、もともと1次産業から派生して2次産業、3次産業というように産業が広がっていったのではないかと。昔、大豆をつくっている農家が冬の間味噌をつくって行商で売れば、これは立派な6次産業化でありました。このように昔を調べると、農業とは伝統的に私たちにとって大事な産業なのだと子どもたちに言い聞かせています。

農業、つまり私たちの業界が置かれている状況を整理すると、カロリー自給率、つまり穀物ですね、これは農林水産省の方もたくさんいらっしゃる前で恐縮ですが、現在日本では39%しか自給できていない。カロリーとは私たちが動くために必要なデンプンですね、これが日本では今39%しか自給率がない。

ここで昭和40年度と出てきますが、1964年は昭和39年です。私が生まれた頃はなんと73%の自給率がありました。これがたかだか50年で自給率が40%近くまで下がっている。これは食べ物が洋食化したというのがありますけれども、これから出てきますが、人口減少社会に向かっていく大事な局面を迎えているということを私たち米農家は理解しなければいけません。

一方で、農業者人口はどうなっているのか。これも1964年には1,200万人近くの農業者がいたのが現在は200万人に減っています。それに加えて、平均年齢は69歳ぐらいではないかと言われているので、あと10年後、20年後、担い手はどうなっていくのか。私たちが考えるには、担い手はいなくなってしまうのではないかと思います。能登では平均年齢はもっと高いと思っています。能登は大体75~80歳ぐらいの平均年齢ではないかという印象があります。10年後、20年後に農村はどうなっていくのか、真剣に考えていかなければいけません。

私は20年前に脱サラをしまして農業を始めましたが、私で5代目の農家です。父が4代目、私が5代目です。20年前に脱サラしたときに、本当に明るい農業の未来を確信して就農したことを覚えています。新聞社の方や皆さんから取材を受けて、「奇抜な人やね」と。「農業なんて今からだめやがいね」、「おまえ、やっていけるんかいね」、「サラリーマンしとったほうが儲かるやろがいね」、「もったいない」、このようなネガティブな言葉をたくさんもらいましたが、私は本当に雲1つなく、農業こそこれからサステナビリティ、持続可能性があって、生物多様性、言い換えるとバイオダイバーシティですが、それを守るうえでこれから重要な産業になると、それくらいの思いを持って就農いたしました。

ここで、私たちのフィロソフィーがあります。グループの経営理念は「千年産業を目指して」。1つは持続可能性、2つは生物多様性、最近バイオカルチュラルダイバーシティということで文化も加わっており、生物文化多様性といいます。持続可能な社会の一員としてグローバル化の中でも有機農業を基盤とした地域の創生を目指す。「シンク・グローバルリー アクト・ローカリー」という古い言葉がありまして、地球規模で考えながら足元で行動せよという意味ですけれども、最近私たちの社内ではそこに「地域を理解して世界に向けて行動せよ」という一文を加えまして、社員一丸となって自分たちがどうあるべきかを考えながらやっています。

もう1つ私たちにはミッションがあります。1つは、日本の耕作放棄地を積極的に耕します。日本には今39万ヘクタール、49万でしたっけ、富山県ぐらいの広さの耕作放棄地がありますけれども、私は20年で0.03%の耕作放棄地を1人で開墾しました。耕作放棄地マニアと呼ばれていますけれども、耕作放棄地を見てもったいない、耕さなきゃという気分になるのです。ということで1つ目のミッションは色々な耕作放棄地を積極的に耕します。

2つ目は、有機農業を通して日本の食料自給率の向上に貢献します。3つ目は、新規就農者の研修受入及び育成を行います。4つ目は、農産物を通じて地域の雇用を創造します。5つ目は少し大げさですけれども、農業を通じて東アジアの食料安全保障に貢献します。これは、TPPという突拍子もない言葉を私たちが知る前に、東アジア貿易圏のような構想がありまして、その中で私たちの水稻農業がどのようなことで貢献できるのか深く考えた時期がありまして、そのときにつくったミッションです。

ここに2つのシンボリックな鳥が出てきます。石川県の能登地区と新潟県の佐渡は世界農業遺産に認定されまして、その生物体をみんなで守っていこうという運動をしています。このトキとコウノトリが日本で絶滅したのは私が小学校低学年の頃です。

やや難しい図が出てきますけれども、この1964年、ここで私は生まれています。これは日本で農薬が普及したときの出荷額で金額ベースです。そして高度経済成長時代では、農村から人々が労働者として2次産業、3次産業にどんどん流れていきました。それによって人手不足となる中で、やはり化学合成農薬と化学肥料は地域の農業に対して、ある意味貢献したと私は思っています。ただ私は子どもの頃に、農薬などで地域の環境がどう変わってきたのか、子どもの目線が一番近くから見てきました。このときに私のフィロソフィーが構築されます。つまり便利になる、効率化される一方で、やはり失ったものがたくさんあります。生物多様性も失いました。色々なものを失ってきた。50年経った今、環境保全型農業と少し言われるようになりまして、そちらのほうに向かってきている動きもあり

ます。このような状況で千年産業を目指す私たちとしては、いかに環境と調和して仲良くやっていくのか、これが1つの大きなテーマだと思っています。

これが昭和35～36年頃の金沢市の競馬場の近く、河北潟干拓地の周りの光景です。55年前はこうだったわけです。これが60年ぐらいでこのような風景がなくなりました。これは私が子どもの頃、このようにして河北潟に船をこいで、ヒシという水中植物の根っこを、これは栗みたいな味がしますけれども、子どもたちが採っている。このようなことをして遊んでいました。これは昔の河北潟干拓地で半農半漁といって漁業をやっておりましたが、大変豊かな生物多様性がありまして、海の魚、淡水の魚、こういったものを採ることができました。

ここで、皆さん御存じのように、2015年に国連が持続可能な開発目標を出しました。このとき私は、これこそ農業のあるべき姿、根底になる考え方だととてもしっくりきまして、自分が目指してきたものというのは、やはり持続可能な開発に非常に関係してくるのだと。つまり地域おこし、地域のことを考えながら、でもやはりグローバリゼーションは進んでいく。その中で日本は何をすべきなのか。日本の中で、地域で生活する私たちが、農業を生業とする私たちがどこを目指すのかという点でヒントになった、これはアジェンダです。生物資源、2万3,000種が今絶滅の危機になっているとか、色々なことに関係しますけれども、農業は食料問題、移民問題、水の問題、色々なところに関わってきます。ですから、そのような中で農業というのは大変ベーシックでなおかつ基幹となる産業であるべきではないかと考えます。

私は農林水産省で地球温暖化の小委員会の委員をやっておりまして、今農業界で温室効果ガスを2.6%から2.8%ぐらい放出しています。これを農業分野でどうやって減らしていくのか。もちろんトラクターで使う軽油などがありますけれども、耕し方の問題や化学肥料はどうかなど検討しています。他にもカーボンストックなど農業の役割としてどのようにやっていくのか。ですから農業というのは本当に使命を持った産業であり、多面的な意味を持った産業であります。

農業分野のアジェンダは何なのか。私は、やはり国として最低限の自給率を持つ、これは1つの責任だと思います。日本には真水があります。この豊かな真水を守っていく、これは私たちの祖先がずっとつくってきた農業用水路、これをどう守っていくかということです。これは日本が誇る、世界に通じるインフラです。こういったことを子どもたちや産業界の皆さんと共有したい、そのように強く思っています。

では農場で何ができるのか、常に考えています。農場には納屋があるから、その上で太陽光発電をしたらどうだろうか。太陽光発電をするときにFITで売電機が入った。これだけではおもしろくない。消費者とつながって、買う理由の中で自分たちの電力に出資してもらおう。こういったことを行っています。これをすることによって、都会の方に田舎へ関心を持ってもらえます。これからは都市と農村をどう交流を深めていくか。どんどん農村人口が減っていきます。このような状況で、都市の人がいかに能登に来てもらうか、能登に来てもらって関わってもらおうか、場合によっては移住してもらおうか、こんなことを妄想しています。

これは能登の門前の山是清というところの農舎につくった太陽光発電です。1997年、20年前に私は脱サラしましたが、そのときに私が描いた自分がやる農業の設計図がこ

れです。当時は、父親、母親、私、アルバイト1人で売上が3,000万円ぐらいの生業でした。やっていたことは、米と麦と大豆をつくっていただけです。ここで私が脱サラして20年前にスタートしたことは、1つは豆腐の加工を始めました。今でいえば6次産業化ということだと思います。もう1つは、有機農業に転換しました。これは環境保全型農業へ転換したということです。もう1つは、耕作放棄地を中心に規模拡大を開始しました。1年に10ヘクタールずつ周りの農地を開墾していきました。これを20年間やった結果、この図で書いてあることは、何らかの形でほぼ達成しています。つまり農業という産業から見えること、関わること、できることについて思いっきり夢を広げたわけですね。それをこつこつ自分なりに法令遵守しながらやって、現在に至っております。

かつてグループ全体で3,000万円だった売上が現在5億円ぐらいの生業になっています。雇用も、当時アルバイト1人だったのが、今グループ全体で40名ぐらい働いております。第1次産業は雇用創出型の産業であるべきだと思います。1人当たりの粗利益がうちでやると500万円になりました。先般、地元の本当に優良の金融機関に聞いたら、1人当たりの粗利益が大体1,500万円だそうです。3分の1です。しかし、私たちは雇用創出型の産業として何とか1,000万円ぐらいまでに持っていければ、終身雇用なおかつきちんとお給料を払えるような生業になるのではないかということで、今農場で25周年、金沢大地で20周年に向けての計画、目標、行動指標をつくっている最中です。

これからますます人口減少社会に入っていきます。私たち米農家は長く生産調整をやっていますけれども、私は3割生産調整をやっています。なぜ生産調整をするのかを自分たちに問いかけていくと、やはり30年後、40年後に口がなくなるマーケットに入っていくわけですね。これは私たち米農家の大きなテーマです。どうするのかという一方で、世界の人口は増えているわけですね。

私が輸出に最初に挑戦したのが2009年です。少し早かったのですが、2009年に何とかお米を輸出できないかとマーケティングをしたら、価格的に合わないわけですね。なぜ合わないかというと、ずっと価格政策をしてきたわけですね。要は、所得が下がらないように高くしよう、高くしようと、少し言葉が悪いですがけれども、日本全国の農家でカルテルをしていたわけですね。人口は減っていく中で、次の世代にバトンタッチできるのかと考えたときに、もう輸出は使命だということを考えまして、世界中の短粒種、ジャポニカ米の価格を調べました。競争にならないです。どうすれば良いのか自分なりに考えたことは、加工品、例えば味噌や甘酒、日本酒、こういったものに加工して、ドメスティック、つまり日本の原料であれば、ヨーロッパやアメリカ市場で認めてもらうチャンスがあるのではないかということで、地元の中村酒造さんと一緒に、有機栽培でつくったお米の日本酒を開発して、これをヨーロッパに持ちこんだのが最初の取組です。その後何カ国か輸出することができましたが、震災によって放射能の事故が発生し、輸出が全てなくなりました。

ヨーロッパのバイヤーの方が言うには、チェルノブイリのときに、イタリア産のハウレンソウからも高い放射能が出ました。私は白山や立山に守られているので安全です、と話をしても、地図を示しながらどう担保できるのかと言われ全部切られました。それからこつこつもう一回取り組んで、今、お米では10トンぐらいアメリカに輸出していて、例えばおむすび権米衛さん(株式会社イワイ)というおむすび屋さん和タイアップをして、おにぎ

りの原料として輸出をしておりますし、「AKIRA」という有機の純米酒もアメリカに3,000本ぐらい輸出しています。これは新規需要米とかにはならないですけども、国益にかなう取組だと自負しています。

耕作放棄地という言葉が出てきましたけれども、これから少し写真を見ていきますが、これはまだ生ぬるい耕作放棄地でもっと木が生えているところもあります。こういったところを開墾しています。左側に見えますのは蕎麦を植えたところです。

能登に春蘭の里という民宿がありまして、ここで農家民宿への修学旅行生の受入の手伝いもしています。昨年も大阪、東京から6校の子どもたちが来て、食育などの様々なことを学びました。

右はヤマメをただ焼いているのではなくて、この炭は能登の間伐材を切ってつくった炭です。ここでは、子どもたちにカーボンニュートラルについて教えます。昔の里山というのは循環型の社会で、きちっと炭素循環していたのだよと、こういったことも教えます。ですから、能登の里山は資源の山であり、教育資源の源泉です。ここに子どもたちを連れてきて日本というのはどのような国なのか、こういった潜在力を持っている国なのかということも議論します。もちろん田植え体験もやります。

もう1つ大事なことは文化です。ここには歴史や文化があるので、子どもたちと文化を学びます。これは食育の授業で東京にうちの小麦粉を送ったという話です。

これが先ほどちらっと御紹介したオーガニックの日本酒で、「AKIRA」というのは私の父親の名前です。

今、EUとアメリカのNOP認証は同等性が認められておりますけれども、当時は同等性がなかったので、EUの認証とアメリカの認証をそれぞれ取りました。トリプル認証という形で輸出をしていましたが、これは私たちがこれからお米をつくっていく上で本当に大事な取組です。

ということで、早口ではありましたけれども、結びとしては、農業は助成金も多く入っており、なかなか再生産できない産業になっていて、私たちもたくさんの助成金を頂いています。ただ、その中で私たちの存在意義、もちろん安全な食料を供給するということもありますが、やはり大きいのは雇用の創出。地域における働き場所として第1次産業は大切なものです。

もう1つは、ふるさとの資源を活用してふるさと、地域に来る理由をつくる。おいしいカキがあるよ、おいしい牛肉があるよでも良いし、とにかく日本の中で地域にある資源を掘り起こして、これを大切に、事業化して、都市の方々ひいてはインバウンド、世界の方々が金沢能登に来てもらえるような仕組みづくりを1次産業から考えていくことが6次産業化ということではないかと自分で理解しております。

どうも御清聴ありがとうございました。

以上